

研究

在、浦の供養塔と彦島

宮下良明

(会員 佐伯市古江区)



はじめに、近世中期元禄—安永時代(二六八八—一七八〇)約百年間佐伯城主五代毛利高久侯—八代高標侯の代まで領内諸方に豊かな人間性を物語る。虫魚族を吊った素樸そまと思う供養塔が在

浦に造立されている。既に先人より、研究され紹介済みの塔もあるが、時代背景を展望する上で大事な遺品と考えられるので四基の供養塔の造立意義と信仰心、更に彦島と近海、浦を結んだ歴史を思いつくまに述べてみたいと思う。

(一) 蝨蝗衆災供養塔 拓本(1)



拓本(1)

右の塔は弥生町大坂本井崎川沿いの土手に現在立っている難しい名の供養塔を指す。造立の裏には蝗の大群により稲の被害が甚大であったものと想像される。

農葉の無かった当時、村人達の労苦は大変であっただろう。虫送りの行事は諸方共通して有ると聞いている。だがしかし虫達を吊った供養塔は佐伯地方だけに見られる大切な文化財石仏と認識している。拓本で判ると思わ

れるが、虫に刻まれ如何にもおおらかな土地柄を感じる供養塔と思う。いずれにしても焼殺された虫も亦膨大な量であっただろう。思うに虫とは云え生き物、焼殺され行く悲惨な地獄図を目前にした村人達は、憐れな虫達の冥福を祈ると共に供養塔を造立して後世に伝え残した心豊かな人間性は、今日此の塔に密かに生き続き、心ある人々が先人の行跡を偲んでいる。

猶、寛延三年（一七五〇）の造立は、堅田踊りの口説きお為半藏事件の翌年に当たり、七代城主高丘侯の時世。

(二) 江海魚鱗供養塔 拓本(2)



拓本(2)

拓本(2)裏側



拓本(2)左側

此の塔は西上浦区内ノ浦海光庵佐伯四国八一番札所入口に立つ極めて素樸と思われる供養塔の名を云う。

裏面に殺生を戒める碑文が刻まれている。ただし、風化が激しく読み取りは困難なようであるが、幸いにも「佐伯地方碑文の解説」木許博著に掲載され、先生が読み良く解説しているので、参考にして戴ければ有難い。江海とは大入島の北、彦岳側の瀬戸を指し彦島を中心にした海域。つまり、佐伯湾の一番深奥部を指す。

古来魚場の宝庫で知られ無尽蔵と云われる魚群の通り道に当り、今も各浦で漁が盛んに行われている。

魚鱗なる意は概ね此処の海道で獲れる、佐伯イリコで名を為した。小イワシ・チリメン・キビナゴ・カエリ・ゼ

ンゴ等を総称して魚鱗なる字を用いたものと考えられる。
 今は幻まぼろしとなった漁法小引網で大量捕獲し、大釜に入れ煮干す。この利益が運上銀(税金)に取り立てられ「佐伯藩」の財政が豊かであった歴史は衆知の通り。その証左に「佐伯の殿様浦で持つ」と云われた所以ゆゑんは此の海を指した。名文句の元でもある。

元文五年(一七四〇)の造立とあり、六代城主高慶侯の代、猶、供養僧は、戸穴万休院二代住職祖髓そすいで後述する仁叟にそう和尚は初代になる。

(三) 経王魚鱗供養塔 拓本(3)

右供養塔は大入島区高松浦の大休庵(養賢寺末庵)前方墓地に大小五輪塔の中に造立され、塔名に合わせた禪語の碑文を側面に刻んでいて文化財としても大事な遺産と



拓本(3)その1



拓本(3)その2 右側



拓本(3)その3 左側

考えられる。

経王とは禅語經典の一部と推察している。その功德にあやかり魚達の成仏を導き供養塔を造立して弔った。浦辺の人々の信仰心には見習うべきものがあると思う。「助志信男信女」とある手熱く魚達の冥福を祈ったものであろう。碑文に「蠢動合靈」とは如何なる意味や、識者に問いたい。当時養賢寺の名僧で知られる「珠月山」

謹題とある(拓本3)。異体字も見え前塔と同様石造美術の研究からも珍しい石造仏と思う。

猶、珠月山の金石文は佐伯領内教基の大乗妙典一石一字塔に観る事ができる。

明和三年(一七六六)は八代城主高標侯の代に当たる。

(四) 魚鱗供養塔 拓本(4)

右の塔は佐伯市^{ひのはし}啼干区地藏庵(佐伯四国八五番札所)



拓本(4)



拓本(4)左側

墓地に座すと云った感じの墓塔型で、花灯彫りの正面に豪快な字を陰刻し如何にも素樸と云った感じに見える。造立の主旨は前掲の供養塔と変らぬ信心者により立てたものと思われる。側面の年号に安永四年(一七七五)とあり第八代城主高標侯の時代。

以上、彦島を取り巻く三基の魚鱗供養塔を紹介した。時々浦辺漁民が厳しい運上銀(年貢)を完納し、生きて行く為には如何に信心信仰が大切であったか、上述した供養塔から其の一端を伺う事ができると思う。

(五) 彦宮三所権現と彦島の関係

右神社は佐伯市宮ノ内区に鎮座、佐伯十二社の一社を指す。次の棟冊^{むらた}で彦島との由来を追究し以下小論したい。

・棟冊銘

前文の概略を説明すると初めに豊前国(福岡県)彦山の大権現が北の大山に影向(神仏が一時姿を現す事)した以後此の山を「彦岳」と号した。
更に前方の渚に浮かぶ小島の北崖松ノ下に神が移った。此の島を彦島と呼称、下の海を通過する舟が頂上を

領文書に「戸穴荘」と明記されている。(佐伯氏一族の興亡)下つて中世後期にはオランダ船リーフデ号の漂着地点として研究され、近世の初頭佐伯城主初代毛利高政侯が浦々の水夫屋敷に年貢課税(古文書)等々、多くの歴史が秘められた地域は史家の認める処でもある。

おわりに、彦島の近隣に造立される魚鱗供養塔と周辺の歴史を結んで小論してみた。造立の目的と背景は既に述べたものから判断を乞う。

また、彦島の古事を想うと豊前国彦山より彦岳、彦島、彦宮と彦を通字に用いた地名には多くの歴史と伝説が秘められている事も判つたものと思う。

次に彦宮三所大権現棟冊に謳われた彦岳より北崖の松ノ下に神が影向して彦島と名付けた。其の北崖の地(図参照)は今日大きく切り取られ何処かの埋立てに運ばれて昔日の面影はない。曾て古墳と伝えられて来た由緒の地であったが残念な思いがする。更に江海と呼ばれた周囲の海は有害物質の埋立に利用された。

いずれにしても、大島く大入島く彦島と、日豊海岸国定公園の景観に欠く事の出来ない意義ある島の一つでもある。先祖より受け継がれてきた、風光明媚、きれいな

海佐伯湾を後世に残す責任の有る事を人々は忘れてはならないと考える。

【参考文献】

佐伯地方碑文の解説 木許博著

佐伯志 佐藤藏太郎著

弥生町の文化財 弥生町教育委員会

外歴史文献其の他

川名のルーツ

◆野津川 野津は野津市ともいわれ、交通の要地。津は港から出て、ここでは人の集う所。古く倉院が置かれ野津院とも称したので、川名も野津院川という事がある。

◆緒方川 緒方一族の本拠地、緒方郷を流れる。緒方氏は大蛇の末で、背にウロコの模様があるので、尾形という伝説がある。伊藤常足は小泉(おあがた)に由来するのだからと言う。

◆三重川 市場町の三重を流れる。内山観音に係する御会(みえ)の市からという説がある。あるいは小盆地での河川合流による三江は考えられないだろうか。古く小坂(こさか)川ともいい、その源流が三つある。(『日本全河川ルーツ大辞典』)